

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第101回

60年代ポップ・アートとは何だったのか。 —広告産業の構造的変貌の関数としての民衆図像

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

壁画的なものの変貌

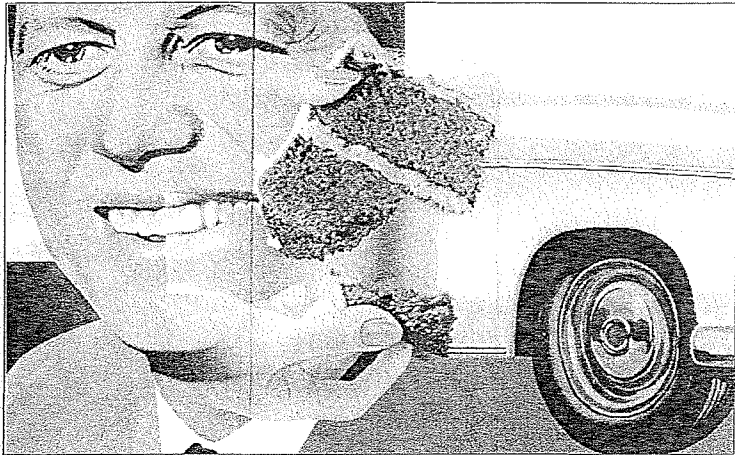
ジェイムズ・ローゼンクイストは、アンディ・ウォーホルらとともに、北米ポップ・アートを代表する藝術家。だが彼はその履歴を巨大な壁面広告塗装職人として開始していた。はたして広告塗装技法とポップ・アートにはいかなる連続/断絶が潜んでいたのか。

そう問うてみると、ここで探索の視野を壁画一般の歴史へと拡大する必要がみえてくる。フランス大革命からナポレオンの戴冠へ。そうした歴史的事跡の公式画家となったジャン=レイ・ダヴィッドは新古典

派の雄として記憶される。その末裔が19世紀後半のアカデミー絵画。その重鎮のひとりジャン=レオン・ジェロームの描いたローマ時代のコロセウムでの拳闘やキリスト教徒殉教の場面は、やがてウイリアム・ワイラー監督の《ベン・ハー》(1959)に至るハリウッド映画の歴史絵巻に生まれ変わる。その途上にパブロ・ピカソの《ゲルニカ》がある。ドイツ軍の空襲によって壊滅した町を描いたこの寓意画は、1937年のパリ万国博覧会に、スペイン共和国展示館の壁画としてお目見えした。この段階で万国博覧会は商品見本市から映像戦略の舞台へと変



母とともにロードサイドの巨大広告を見るジェイムズ・ローゼンクイスト。1954年ごろ、ミネソタにて。
出典：DebraSolomon“Pop Art Era”,2009



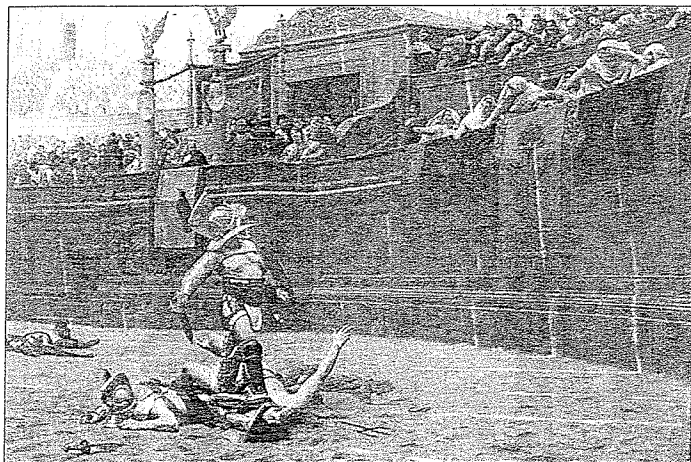
ジェイムズ・ローゼンクイスト 《President Elect》 1960-1, 1964

貌を遂げていた。日本が遅まきながらこの事態を察知して巨大な「写真壁画」《躍進日本》ほかを展示したのが、つづくニューヨーク博覧会。ここで抜擢されたパウハウス帰りの山脇巖は、第2次大戦中の1942年、陸軍記念日には日劇ビル外壁に、105畳敷きの巨大な写真壁画《撃ちてしまむ》を設置する。

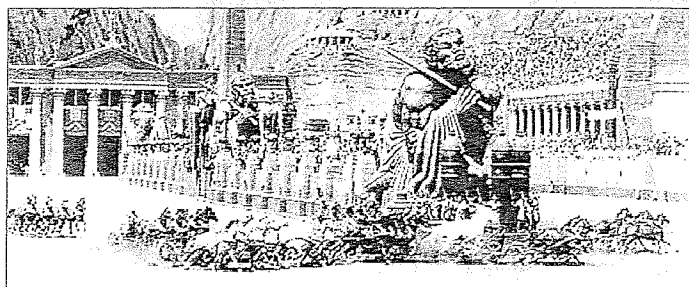
むろんこうした国策プロパガンダと戦後の巨大広告壁画とは直接的な連続性はあるまい。だが戦後ポップ・アートは巨大・大量の複製画像の氾濫という時代状況の周辺に寄生して発生した文化現象ではなかったか。そこに従事した画家たちの履歴からは、両者の境界領域が験した時代の変貌、複製広告産業の構造変革が炙りだされてくるはずだ。藤田嗣治の場合も、メキシコや南米での体験に裏打ちされた壁画への開眼が、帰国後の銀座のコーヒー店内装や、平野政吉から依頼された畢生の大作《秋田の祭》(1937)に繋がってゆく。北米ポップ・アートの洗礼を浴びた、経済成長期日本の70年代ならばどうか。横尾忠則や田名網敬一の経歴も、ポップからグラフィック・デザインへの越境の軌跡を刻んでいる。

民衆芸術？ プロパガンダ・メディア？
Pop Artというが、語源からすればそれ

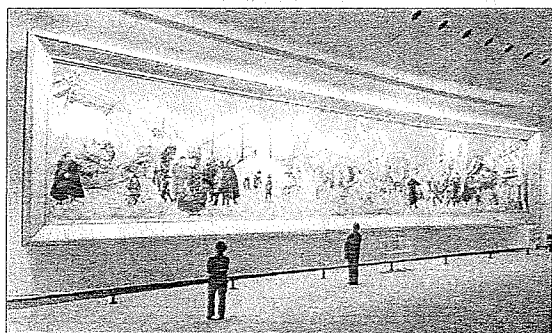
は民衆芸術である。民衆が日常親しむ図像のごく一部が、美術の世界でポップ・アートとして市民権を獲得し、「誰でも15分は著名人」を製造したりもした。元来イギリスに淵源を発しながら、なぜか北米東海岸の特許となったポップ・アートは、なぜ短命に終わったのか。それは広告産業の周囲の残存領域に寄生し、あるいはそれを温床として育った来歴からも説明できるだろう。映画館の看板広告もながらく専門の職人が絵筆に技巧を尽くして描いていた。それも過去に潰え去って久しい21世紀の10年代、なお命脈を留めるのが、日本でいえば、公衆浴場・風呂屋のベンキ絵ではないか。これはわずか半日の閉店時間のあいだに塗り直しを完了させる特殊技能である。共産圏の巨大プロパガンダ壁画も、元来はアカデミーの公式戦争画やパノラマ、ジオラマの系譜を曳く。南米やインドならば、大学の構内至るところにチェ・ゲバラの肖像など革命壁画の伝統がある。日本の大学構内ならば往年のタテカンだが、これらはすでに駆逐されて久しい。だが社会の周縁に追いやられた表現の自由は、キース・ヘリング(1958-90)をはじめとする落書き絵画の世界言語に変貌して、公共空間の隙間に増殖を遂げてやまない。



ジャン=レオン・ジェローム 《Police Verso》 1872
フェニックス・アート・ミュージアム



ウィリアム・ワイラー監督の《ベン・ハー》 1959



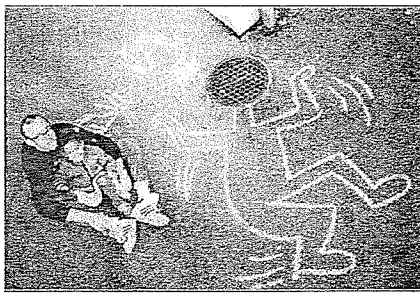
藤田嗣治 《秋田の行事》 1937 秋田県立美術館



1943年に東京有楽町の日劇および大阪高島屋の正面に掲げられた100畳敷写真大壁画《攀ちて止まむ》
原画：宮本三郎 写真撮影：山端席介 現場管理：山脇巖



ネルー大学構内、図書館壁の 政治風刺壁画（製作者不明） 撮影：稲賀繁美（2013年10月）



キース・ヘリング、ニューヨークの路上で子供と一緒に

International Symposium Multi-Locale Pops in the 1960s

Sponsored by the Terra Foundation for American Art



Keynote

Shirley Chant
University of California, Los Angeles

Date and Location

Saturday, March 23, 2013 (10am-5pm)
Sophia University, 2nd-15, Room 501

Organized by

Kobe University
Sophia University



Speakers

Shirley Chant
University of California, Los Angeles

David Lauder
University of California, Los Angeles

Robert Rauschenberg
University of California, Los Angeles

Robert Rauschenberg
University of California, Los Angeles

Robert Rauschenberg
University of California, Los Angeles

Robert Rauschenberg
University of California, Los Angeles

Robert Rauschenberg
University of California, Los Angeles

Robert Rauschenberg
University of California, Los Angeles

国際シンポジウム「Multi-Locale Pops in the 1960s
同時多発するポップー1960年代を中心に」（主催：神戸
大学国際文化学研究所、上智大学国際教養学部）のポ
スター。作品は、田名網敬一の《コラージュ・ブッ
ク》44（1971）。

*International Symposium, Muti-Locale Pops in the 1960s, Kobe University, Sophia University, March 29, 2013に取材した。主催の神戸大学国際文化学研究所・池上裕子氏、上智大学国際教養学部・林道郎氏をはじめ関係者に謝意を表す。（筆者）

編集雑記

前号（211号）の訂正とお詫び
▲巻頭千葉奈穂子氏稿のうち、P.3の
写真キャプションで作品名《石と語る》
の前に「Father's Houseより」を追加。
さらに「サイアノタイプを「サイアノ

タイププリント」とする。また、P.6右
段下から12行目「大きめの石を運んでき
て並べていたりしている」を「…
…並べていたりしている」に訂正。

おびえの時代（続）

▲東京都美術館が同館での彫刻展出品
作のひとつを「政治的で苦情を招きかね
ない」として撤去を求めた事件（前号本
欄参照）。

▲即座に大きくとりあげた『東京』に
ついて、「朝日」も後追い（《ニュース

「アートが政治宣伝か 美術館ピリピリ」、
中村真理、20140404）。

▲こちらでは、近年の、公立美術館に
よる「自粛」や「過剰反応」の事例が、
いくつかひろいあげられています。

▲たとえば、<2012年夏には、従軍慰
安婦を扱った絵画や彫刻に「館の公式見
解なのか」などの苦情が寄せられ、主催
者との協議で作品は撤去された。13年夏
の美術家平和会議の展示会では、苦情が
来る前から館側が対応。従軍慰安婦像の
写真に貼り付けた日本政府に補償を求め